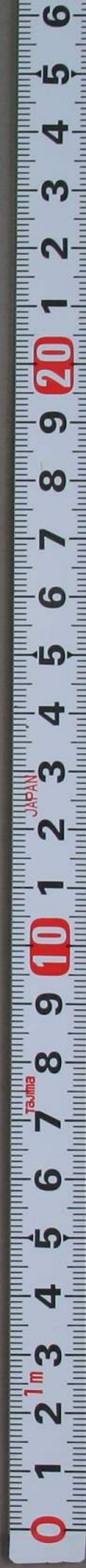




茶房雜編

全

7多9
281



門多9
號281
卷



茶人徒然草

抄錄

聖茶館記

香實老人 著

雙鉤模寫

茶を浮ちあぐ、是の凍結、韋昭小茶賦とて、酒代り、
又謝安法網、家不語、一時茶葉賦、設けて、客を、
河東北時、まて、あ方ふの、茶、以て、心、を、忘、る、
又、年、中、小、太、山、乃、靈、巖、寺、の、わ、あ、寺、中、座、禪、す、
茶、以、飲、一、あ、て、眠、と、と、茶、一、心、を、忘、る、
一、心、を、忘、る、と、と、茶、の、法、式、定、ら、る、
中、を、始、め、て、茶、は、と、定、む、法、を、後、別、意、法、の、人、あり、
此、茶、以、好、と、茶、を、著、一、茶、の、功、乃、び、茶、の、法、以、法、一、茶、
具、二十、口、と、造、る、是、近、傾、慕、る、者、多、一、又、法、以、建、安、
一、り、一、時、山、水、の、画、一、幅、と、聖、同、小、町、有、一、建、茶、一、様

宗恒字凍平師小僧り紹臨利休城小僧り王侯より表高
小僧り親もろく家へおれとて居光と云く兼礼もろく
夫程起と慕うて此也大徳寺に参る所多く福元
法師にて代しなり兼人其母に福もとけよといひこれ
小僧りなり（兼前出）
乙部曰珠光海峯南都氷門より京居本工市致好ま
そ家にも住り大徳寺に跡言ふ得たりといふ兼人
兼人乃ち兼定海峯然として信じてゐる事能く寺に
情は藏土門ヒチヤトた文可久ヒサの意あり（下）兼人
由緒書に一巻たふ挙く（文）書を手にして
今十一歳の頃村々寺の中法林堂に住す（村々の語あり世之跡支の井に）
廿歳以降よりお忍といふ所竟訪せしめ用ひず遂に師中
有欲との趣きとつけは林堂といふ池泊乃ちある三才

のうろ福清より重報業大徳寺三珠庵小僧す
 の碑ありし書と讀む。元禄より一睡如く是れ一丘之憂
 て匡不同、匡同人ともいふが、いふ所保つて實に次雲若
 師好む唯弟臥喫して、それ花と出さるゝ一丘、眼。
 もくありし心ト云

由緒書

東大寺、福宮社人

南都今山法所

土門左文可久

可久休、累代南都に居り、以て其則多門山、故に相承經正
 么秀一統より石なり中興、是又宋ノ徐悲ノ子、清治肩衝茶入存星堂
 升三権を介、筆意并珠文、弟屋と畫く、足祖之師、
 清和は、由記を大ニ様、無照院并政公、御母は名
 以て珠文、平より後、久乃及播下、言事、その名、以て傳へ
 授は、ト云

上供 風車に須中切り目次 但家色

一文字、字、一文字のあききき、此物、珠文、始り、由

軸を、華、欄、格、軸、る、は、る、

中供、結、緯、た、色、黄、下、供、

以上、右、肩、衝、入、

上、右、大、米、入、蓋、より、右、肩、衝、入、細、川、三、折、り、

より、小、端、を、知、り、る、は、蓋、より、上、三、折、り、大、米、蓋、を、知、り、

る、米、蓋、を、知、り、る、の、米、蓋、を、知、り、る、由、

右、肩、衝、入、

一、右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、千、折、り、長、蓋、を、知、り、る、由、

右、肩、衝、入、千、折、り、長、蓋、を、知、り、る、由、

右、肩、衝、入、千、折、り、長、蓋、を、知、り、る、由、

馬、麟、画、

記、し、る、は、蓋、を、知、り、る、由、

蓋、を、知、り、る、由、

許、由、蓋、を、知、り、る、由、

蓋、を、知、り、る、由、

底、蓋、を、知、り、る、由、

下、供、

以上、細、川、三、折、り、

右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、

右、肩、衝、入、

主御と侍下珠光の好紹略と兼家以迄統と一孫家
御也とのこと

家名とて是を家とてよまむに少くも御を以て稱すとて
中興又萬山名に請ふに平里水院に於て中興の好紹閑似家
とて家とせし一閑高紹略と号す 中興

正紹紹略を子孫家 足藩小寺はせしはゆゑの子
新嘉の仲定とてしつて次々子孫に傳ふ
子のはと
紹略の子は家名に
はたけり

○千利休は堀江市の初田中氏後千とありき 中興
とて市に足利の家所家小はして田朋從とつとありきと千河江
とて千氏に足利の家所家小はして中興元龜年中
正親所上皇の勅ふよりて兼家と製しとてある
と皇あまこと褒しと居士の号と 師ふ者古より三千石

此地のゆへに中興後世の好古溪和尚 大徳寺の張友溪はに
此れ是なりとせし 小福とて力とせしとて 福光の玄妙とて
正親所とては 足利の家所家小はして中興元龜年中
とて千氏に足利の家所家小はして中興元龜年中
正親所上皇の勅ふよりて兼家と製しとてある
と皇あまこと褒しと居士の号と 師ふ者古より三千石

○天王寺金宗及て張の富も津田宗達の子更幽齋天
信と号す 江月和尚の父より利休と同一く者古より集
三千石とありき法眼和尚位不撰とて之を寺とて堀江宗達
とて父の世にありき 寺在國師と請しとて利休の世より

○利休の多の道春 餅屋 方一の文小 杉本寛徳一斗

利休の多の道春 餅屋 方一の文小 杉本寛徳一斗

○堀南家寺下南坊宗啓 正記曰銀路より の書腰掛子
利休の多の道春 餅屋 方一の文小 杉本寛徳一斗

笠書

一宿実腰掛小来目人金路 いふて 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

一宿の きり 書 きり 版と打て 一斗

天正十二年九月と三

南坊

宗易

○右田主 きり 書 きり 版と打て 一斗

田中與兵衛嫡子

不審庵

柳登斎

利休居士

田中氏

宗易

後三千八百

天正十九年辛卯二月二十八日没

七十四歳

宗淳

少庵

俗名四郎左衛門

元叔

又元伯

宗旦

今日菴

咄々斎

八十一歳

宗左

江峯

逢源斎

堪笑軒

宗佐

良休

隨流斎

宗左

魚叟

寛之斎

流芳軒

實久田宗金子

宗左

如心斎

丁々軒

天然

初宗貞

宗左

啐啄斎

伴翁

隱居名

初宗貞

宗左

了々斎

好雪軒

初宗貞

實久田宗漢子

宗左

吸江斎

初達藏

實久田宗也子

了々斎ノ甥也

宗室

仙叟

玄室

元祿十年丁丑正月廿三日没

千氏本家ノ裡ニ住ス今日菴上ノ宗旦ノ隱居所ナリコレリ

宗守

一翁

似休斎

官休庵

謝翁

長子宗世ニシテ故有テ家ヲ以テ

數内紹智

燕菴主人

劍仲斎

數中斎

又數隱斎

寛永四年丁卯五月七日没 八十七

千氏ハ上京ニ居 数内ハ下京ニ居住ス故ニ時人
千氏ヲ上流トシ 数内ヲ下流トス

以下子孫六人系回略之

乙部曰石川流者 千氏以流者カホモ一ツノ子孫

信長多之弟

織田有樂

後四位下侍從

長益

俗称源五郎

有樂軒ト号ス 如菴

落髪シテ融覺ト云 茶法ヲ利休ニ受 利休没後宗
匠ト称ス 有樂流ノ祖 元禄七年辛酉十二月十三日卒 七十九

主膳正貞隆之男

片桐石見守

從五位下

貞昌

宗関ト号ス

茶法ヲ古田織部ノ門人素山左近ニ受 又利休并遠州ニ
学フト云 素山卒後 多賀左近ト毎哉吉勝ト 貞昌ト三人ヲ
宗匠ト称ス 石州流ノ祖 近宝元年癸丑十二月廿日卒

乙部曰石川流者 商家ノ流連 流脈又繁衍ス

小堀素江守

從五位下

政一

初名

作助

宗甫居士ト号ス

孤蓬

茶法ヲ古田織部ニ受

和漢名墨ノ品ヲサタム

一ノ茶事ノ師ナリ

遠州流ノ祖

正保四年丁亥二月六日卒

六十九才

乙部曰此茶乃以流脈ト云 游藝ナリ

宗易門人

房政

俗称新八郎

久田宗榮

薙髪メ 宗榮ト号ス

母ハ宗易ノ妹

茶道ヲ宗易ニ受 遂ニ茶事ヲ成

トス 久田流ノ祖

寛永元年甲子三月六日没

六十六才

宗榮子

宗利

受得齋ト号ス

俗称利兵卫

茶道ヲ宗旦ニ受

貞享三年乙丑十二月七日没

七十五才

一本三宗玄

以下五省

キ左ノ四人

備流上之

宗悦

涼滴齋

木巴

紹慶

宗溪

提泉齋

宗也

皓齋

宗利

宗嚴

宗利子 宗全

得与齋 号久 俗称ヒヤ勘堂 茶道ヲ江岸ニ受

宝永四年丁亥九月六日没 六十一歳

宗金子 宗也

半床庵 号久 又 不及齋 原叟ノ弟

延享元年甲子正月十三日没 六十四歳

宗也子 宗玄

芳烟 号久 又 厚比齋

明和二年乙酉正月十三日没 六十一歳

宗玄ノ甥 宗参

松雲 追遠庵 又 関齋 宗也ノ二男ノ宗悦ノ男

寛政十二年庚申十一月十三日没 六十一歳 以下道系猶説

宗参ノ養子 耕南

春齋 号久 又 實心 佃氏ノ子

文政三年庚辰二月七日没 六十九歳

耕南ノ子 宗隆

文政七年甲辰 月 日 没

宗隆子 耕隆

文政七年甲辰 月 日 没

原叟門人 堀内仙鶴

堀内洋佐ノ子也 洋佐 椿堂 号久 山田宗偏ノ門人ナリ

長生庵

鶴翁

化當齋

寛延元年戊辰閏十月廿日没 八十才

仙雀ノ養子 宗心

不寂齋

如心齋ノ門人

明和四年丁亥正月七日没 四十九才

宗心

方合齋

宜翁

宗完

不識齋

宗璞

文化十三年丙子二月十日没

如心齋門人 川上不自

孤峯

又不善齋

初 宗雪

宗雪

宗什

石塚宗通以下別卷詳之

原叟門人 松尾宗二

盤只齋

嘉隱軒

松尾流ノ祖

宝暦二年壬申九月二日没

宗五

歌古斎

樂只軒

明和八年辛卯十月廿五日没

七十一歳

宗政

一等斎

享和二年壬戌九月十三日没

六十四歳

宗俊

不管斎

宗五

不佐斎

宗二

玄々斎

正統曰右三氏乃類聚多し彼と省きく是と裁くは
何れも此流を以てよる多しは事不ゆきと云ふ也
初斎 起斎之日

喫茶録二篇抄録

喫茶録二篇抄録

津田舎主

○武蔵國豊島郡追分驛子安山古庵寺所安至明
惠上人住利休居士所持陸鴻漸木居士墓分寸不差

因啓之

多実老人談

○珠光老僧像之因啓 茶道有四和敬清寂 畢竟如何

客曰 意

多実老人談

○不佳斎曰 中啓 珠光紹臨也ては 大抵不時乃茶多し

利休より 茶に兼約以時刻 けつて 之を多しと云ふ
下啓

①河孫院者 秀吉公より入湯の節 彼地河孫院者
新座に利休の亭ありて 湯成りて 其日の茶は
是より 秀吉公より 一のしる 湯は河孫院者

小油はあつりりし小姓おやうにばふらんやとて
よはす。中江幸とて文てまじくしとてさうでかぬ
まじくものちやとて

○田舎乃佐より利休一全をあの屋までつれて来の
帰るやあつて泣き下して。まじく利休も金
てつて来り布と置てまじくして佐はあつて
華布も小奇素あつて。茶飲もしてつてあつて
○利休へつて人茶席に。やあつてあつてつてつて
この本乃多き。ねとてつてつてつて

○利休に。年には切ふたまき丸を。生し。まじく
も丸を。とて。生し。佐へ。まじく。利休。あつて。まじく
好。まじく。底。つて。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく
まじく。四方。まじく。つて。まじく。まじく。まじく。まじく

いしあせ

○上(注) 聚楽亭 玉守三年小奇素とてまじく一棟の事

二棟は小奇素とてまじく。壮素もまじく。威まじく。まじく

岡六七宝は。まじく。名。奇素とて。まじく。岡六七宝は

行事。つて。まじく。御會。御能。まじく。まじく。まじく

次。居。つて。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

これ。寺。院。小。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

○惣。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

○佐。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

茶。以。湯。小。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

と。つて。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

山。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

座。と。まじく。まじく。まじく。まじく。まじく

いふは...
之荷...
...
...

あや...
...

...

...

○別休...
...

○又回数...
...

○又...
...

○又...
...

...

○又...
...

...

○又...
...

...

...

○又...
...

あるに茶は湯とてやうくしてゐる。さうして茶とて、
すくなくとも、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○又日園とて、茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、
茶葉は、茶葉に浸して、茶葉は、茶葉に浸して、

○信長公、秀吉公弘業の所好くありハ漢書、百篇
 半少之の所以を宗偏宗旦人次基が竹下平常宗偏
 察ヒツカ傳ヒツカしとある

○あるの陶工宗慶とて者帰化し
 陶器を製^{ツリ}始^{ハジメ}めたり是樂^{ラク}滿^{マン}
 一旨小聚^{コケツ}の寺あり後和^ワ
 なるより乃^{スナハチ}あるとて之を
 かくて後^{ノチ}宗^{ソウ}慶^{ケイ}とて之のりしうな小^コ長^{チヤウ}の字^ジ小^コ改^{カヘ}りしとて之を
 又二代目より長^{チヤウ}宗^{ソウ}慶^{ケイ}とて之のりしとて之を
 と告^{ツケ}託^{タク}一旨曰^{イツイフ}小^コ長^{チヤウ}宗^{ソウ}慶^{ケイ}と云^{イフ}
 系圖^{ケイド}小^コ聚^{ケツ}の寺あり一旨の説あり
 信^{シン}一^{イツ}より以^{ヨリ}来^キ連^{レン}綿^{メン}お續^{ツキ}す此^{コノ}以^{ヨリ}來^キ樂^{ラク}の

宗度

唐山人飴屋上

天正二甲戌年沒

長祐

宗慶男 田中氏子 稱之 長治郎 上云
文祿元壬辰年没

常慶

長祐弟 長治郎 改名士屋門 〇一合曰己子
樂ノ字ノ印ヲ夕ナフ 寛永十二乙亥年没

長祐弟 長治郎 改名士屋戸 〇一層曰コレリ
樂ノ字ハ印ヲタラ 寛永十二乙亥に斗没

三

道入

長祐弟 吉兵衛
明暦三丁酉斗没
異名 ノニコウト云

長祐弟 吉兵衛 異名 シコウト云

四代

一
入

道入男 佐兵衛
元祿九丙子年没
改名吉左衛門

道入男佐兵諸
改名吉奎門

五代

宗入

一入男 吉兵衛 改名吉屋利
享保元丙申年没

一入男 吉兵衛 改名吉屋門

戎

左入

宗入男 吉左門
元文四己未年没

宗入男
吉左門

七

長入

左入男 宗吉 改名 吉彦

左男 宗吉 改名 吉左門

八

得入

實左二男 佐兵部 改名吉左門
安永三甲午年没

實左入三男 佐兵衛 改名吉左衛門

九代 了入 長入男 吉左門

十代 吉左門 了入男

○宗味 長祐弟 庄左門 坂三住

一 元 實一入二男佐兵衛二層曰一元別一家

三 弥兵衛 一元男 任土裔ト云 寛延三庚午年没

四 弥兵衛 任土裔ノ男 玉水洲裔ト云 二層曰老後樂翁ト号ス

五 甚兵衛 洲裔ノ男 樂翁ト云

○道楽 長祐ノ弟 忠左門 左樂ノ印アリ 寛文元年辛丑没

○妙慶 常慶ノ妻 常慶死後弟妹シテ妙慶ト云ソノ子幼ナルニヨリ母ノヤヤルニ焼

ト云テ樂焼ト云ク○二層曰妙慶ノ妻ト云ナリト年紀ヲ以テオスニ宗慶ハ天正二

○妙僧 左入妻 妙僧焼ト云 明和八年辛丑年没

以上

○宗旦の影ふ人曰この月曜の一軸

宗旦の影ふ人曰この月曜の一軸

○庸軒 五吉庵又徴為少子十二金と云ふ事あり

田氏後五村に改む佐木末葉あり其性幽閑淡薄

少して讀書を好むなり経史にわたりて尤も之に詳

誠神子中興宗旦の父天王一人あり其庸軒流の神

一傳ふも其祖とせり宗旦より筆道と結

筆話別集一巻といふ事 庸軒筆話に記しつる一紙

○相と但る守 宗矩 宗旦に点筆と請ひて知を以て打

んとせしに一点にひたりとて亦ありしと云ふ事あり

且う子兩人に紀あるか即一媒して仕をせしと云ふ

是を宗旦の影ふ人といふ事あり

○上巻 半田底取 下略

一層曰底取土鍋ハ田素焼也津々國本田村に細人

らる即ハ田寺といふ寺あり其内を在るあり紹隆時

代よりなり 天下一玄載 二代月長載

又曰又筑後相川ハ半田村と云ふなり其所を灰土鍋

と焼く即半田焼と云 國主より 建永元年 底取土鍋

以て一献上と云ふ事 其後より 神永元年 頂戴

一居し云筑後坂東寺と云ふなり其半田焼標ハ賣

買する半田國主より其禁あり

○標の御下と云ふ 宗旦方一 歳と云ふ事 小宗旦の

ことと云ふ事 上ハ小巻大目と云ふ事 其後より

人ハ筆と進み候なり 其後より 御下と云ふ

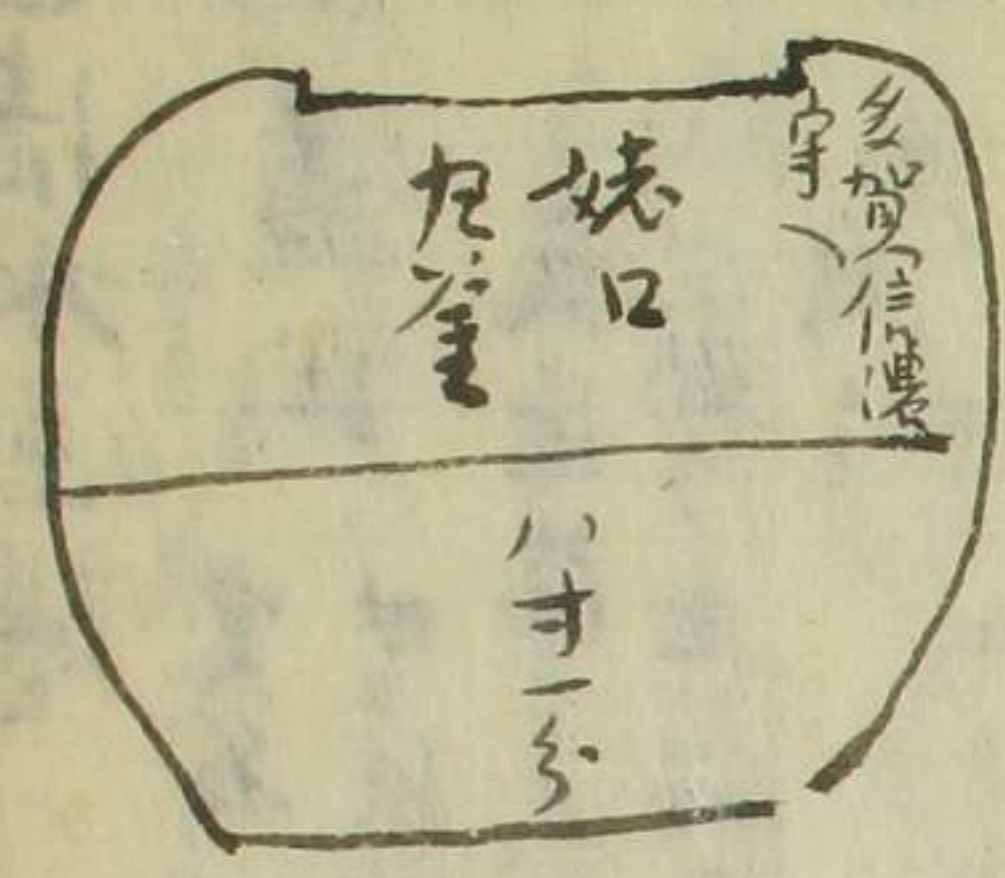
まゝその方を帰國せしむる

○本藩鑄物師棟梁水田太左衛門に世々
務む 信長 寛政 兩々所 常と請ふ 業の所々金
并 花入等と請ふ 其圖并小由緒等 事長久し
次編小續とてこゝに載せしむ

○本藩鑄物師忠三郎その先祖永祿以次事向井郡守山
村小住しつづり金と金銀は清須に住す元和の頃
公古金小増 康久小住とて業の所々風爐釜の類と
再魚す 當家傳乃法よりて金銀 氏時小住とて
送漏とて味のきの上京し金師在兵衛小住とて
さと訂し金銀の所々業不用いふ 近頃其家系
得しとて即左に載す
久左エ門 以上数代同名

二 新六 人呼て喜保新六
忠三郎 氏時
忠三郎 康兼
三 嘉左衛門 康貞
忠三郎 氏貞

○京且の圖せし千家の金銀二十回といふは忠三郎
の家不全圖とて傳ふ 今變屋と差へす 縮墓とて左に
載す 國新略之僅載
其一二



下略

琉球風炉二面合ノ金銀

善、衆人乃之、此乃一之法也。若其書則

一買の資をいりて、
子に与ふは、夫の資なりし

一 榮乃湯成之入 意立活すまふ日 物まゝあり

榮礫水しるしを以て根竈ねいざなりしるし也

一
牧
奇
若
々
屋
身
明
く
子
日
け
る
ふ
え
う
ひ
ん

三つ町をすぬ家上へ

一 ぶちあふふに目利者を不目利せり并に老を不并
せり子あふを不字せり

一筆を以て少くも別のことにして、
いふ所あるものあり
他は其意を可付の故に一時

一、亭子より立ちあがりてさうすう端まで立ち上りて
度よりて之をきく。あつたものゝちやうど

糸の端より

このゆふどあまのすもよふ

遠友反華帶之
飯之
以
余
可
以
之
前
乃

飯抄生道二不之ありて山登りててやし名

業の左とよりくふ面白くものせうあると一ツふいふ

きたるのを解し
しるすをてふに
根實より人

三才に爲るは三才のよし人字に意好む人女也

世にありては名もなき人なり

人よりまじき事にてふに物もあはれなる人にてふに事

有之
有之
有之

館のさへ味茶に上るゝと二の條よりなる

あまにほひしきし 雲に霞より面よりし 大空を

茶乃湯不物
 此を二三
 子も
 名を
 少を
 知し

茶道圖書

完

一 臺目風呂餅
二 臺目炉餅
三 鉢の挨拶
六 菜入おれ
八 灰の
九 風呂名
十二 同 通身具物
十七 同 炭
十八 同 炭
十九 天目
二十 同 外の餅
廿一 袋餅

一 同 風呂餅
二 同 炭
三 風呂名
七 風呂名
九 灰見物
十二 同 炭
十六 同 炭
十九 同 炭
二十 同 炭
廿一 同 炭

二十六 煨掛のり

二十七 細粉は家初

二十九 煙草のり

三十 乃屋のり

三十一 乃屋のり

三十二 乃屋のり

三十三 乃屋のり

三十四 乃屋のり

三十五 乃屋のり

三十六 乃屋のり

三十七 乃屋のり

三十八 乃屋のり

三十九 乃屋のり

四十 乃屋のり

四十一 乃屋のり

四十二 乃屋のり

四十三 乃屋のり

四十四 乃屋のり

四十五 乃屋のり

四十六 乃屋のり

二十六 灰七のり

二十七 乃屋のり

二十九 乃屋のり

三十 乃屋のり

三十一 乃屋のり

三十二 乃屋のり

三十三 乃屋のり

三十四 乃屋のり

三十五 乃屋のり

三十六 乃屋のり

三十七 乃屋のり

三十八 乃屋のり

三十九 乃屋のり

四十 乃屋のり

四十一 乃屋のり

四十二 乃屋のり

四十三 乃屋のり

四十四 乃屋のり

四十五 乃屋のり

四十六 乃屋のり

[illegible]

[illegible][illegible]

字前式



一 空く茶事

一 伝合

硯策

す切二巻 封紙 二巻のし
筆 二巻のし 二巻のし
書切 墨抄 二巻のし 二巻のし
二巻のし 二巻のし 二巻のし

一 たをふ盆

すせりおる敷
又いそぎふし

一 筆箱

字前

五巻のし 五巻のし 五巻のし
五巻のし 五巻のし 五巻のし

伝筆後 敷くし 二巻のし 二巻のし 二巻のし
二巻のし 二巻のし 二巻のし

七巻

孫持合て字未末

未所持合て

但兼を傳る

一尋を指ねて

三尋を指ね

尋といふ指ねるを三尋といふ

一尋を末末

持合て字未末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

一尋を末末

けは我海に流すもあそこの言に神の家もあ

家はおかきすも海に流すもあそこの言に神の家もあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

海に流すもあ

風砂隅部、
そくろりする

板岩、岩中、
入る

風砂、
入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

入る

板
定
年
迄
一
度
入
折
入

風城、石海を以て
之の、石海を以て
字之、年を以て

[illegible]

李郁子

江心寺

五戒

今更に松竹梅の
山の中に入る

龍火解渴

新山居人
 之
 山居人
 之
 山居人

山
庄
詩
集

唐中興入也

そのは水巾る切ける
けしき公室をたてし

香合殿

草木令下
 信名強欲持

大為
掃



級次

一平、爲持生二、爲計者

一、
口
生ニヤクニナケル

[illegible]

樓

上戸の家に在る

有内子也

新をいふる

一汁之甘味

酒

聖天子亮

江之島
至友の毫のせおん

但上より
研々

卷之六 例

又承合 飯後 汁 系 極 清 矣

一
名書心子
楊子次

但領事子時分

石齋先生之說

四ノ一 松ノ字子ヲ見

湯も大海亭
早ハに
時分

75
L
C

聖子居尔

明平水府志

酒をうへとあるふつと酒を酒し
 といふに、これよりいふと、酒を酒し

海
卷

乙未年
 十月
 初九日
 壬戌

勝年之

[illegible][illegible]

一
凡
心
也
海
川
下

一 萬子心 二 万子心 三 万子心

中玄子

月夜思
客心如水

海月

一房

石臼

花

花

花の葉を花の葉に

石臼

花

花

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

花の葉を花の葉に

一 招 招 と ち ち 之

一
 今更和申らん中のそとくをせよ原をせよ
 こゝろをせよ
 是所をせよ
 是所のせ

湯藥 一 攝入 尊攝入

一 弟兄子弟世如元家

[illegible]

子の愛を

一
 茶抄 取茶の取茶茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入

拓拓反
一筆字反
海上有羊候反

招招卷之十

一、
上
下
中

上よりいへば、ある物より、點を又せし
り、またいへば、ある物より、點を又せし

一 招 招 と ち ち ち 之

一
 今更和申らん中のそとくをせよ原をせよ
 こゝろをせよ
 是所をせよ
 是所のせ

湯藥 一 攝入 尊攝入

一 弟兄子弟世如元家

[illegible]

子の愛を

一
 茶抄 取茶の取茶茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入
 茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 ぐりぐり 茶と茶抄 入

拓拓反
一筆字反
海上有羊候反

招招卷之十

[illegible]

上よりいへば、ある物より、點を又せし
り、またいへば、ある物より、點を又せし

よくさうしては五にうと一のち

トニ五にうと一のち

清き水にうと一のちの時を清くしてを

清き水にうと一のちの時を清くしてを

清き水にうと一のちの時を清くしてを

清き水にうと一のちの時を清くしてを

上宮清き水にうと一のちの時を清くしてを

清き水にうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

トニ五にうと一のちの時を清くしてを

熱き水にうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

風乾はけ時少板あり、炭金あり

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

一 羊炭をうと一のちの時を清くしてを

は時をうと一のちの時を清くしてを

但柄をうと一のちの時を清くしてを

とくさくさく正に五にうと一のま

トニ五にうと一のま

清き水にうと一のまの時を清くして

よまよふれとすまよふとすま清くして

清くしてまよふとすまよふとすま清くして

よまよふれとすまよふとすま清くして

上字 清くしてまよふとすまよふとすま

清くしてまよふとすまよふとすま

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

をてト升くときの時分をてト升くとき

かくていつ羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

トニ五にうと一のま

熱字 一 清くして

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

風邪にけしめ板あゝ羊族をて

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

定ふれ羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

はけ羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

一 羊族をてト升くときの時分をてト升くとき

一 弟 妹 お入 室 片 向 入

一 弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

大 平 子

一 弟 妹 お入 室 片 向 入

一 弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

一 弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

弟 妹 お入 室 片 向 入

石 彦 吸 あ ち ー し 又 法
 杉 枝 小 切 利 事 栗 木 ー ー 枝
 又 ー ー 事 木 ー ー し
 木 里 ー 事 ー 枝 木 ー 枝 木



十 六 神 之 石 彦 吸 又 栗 木 ー ー 事 木 ー ー し
 神 枝 上 木 文 神 山 彦 栗 木 ー ー 事 木 ー ー し

子 枝 彦 彦 栗 木 ー ー 事 木 ー ー し

彦 彦 栗 木 ー ー 事 木 ー ー し

